



ぷらっとシネマ

彼女は言わなかった—沈黙を強いる法理とは？『She Said—その名を暴け』（M・シュラーダー監督）

メタデータ	言語: ja 出版者: 働く女性の情報誌 いこ☆る編集委員会 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000437



彼女は言わなかった—沈黙を強いる法理とは？ 『She Said —その名を暴け』(M・シュラーダー監督)

NY タイムズ紙記者ミーガンとジョディは性暴力事件の取材で悪戦苦闘の日々をおくる。やっと探しだした被害女性からの相次ぐ取材拒否。2人を含むチームが追うのは、ハリウッド映画界の大物プロデューサーH・ワインスタインの40年に及ぶ悪行の数々だ。かねてからセクハラ、レイプの噂はあった。被害を受けた女性はかつての部下、俳優、モデルなど。しかしワインスタインは次々と話題作を世に送りだす新興ミラマックス社の創業者で、名だたる俳優たちがアカデミー受賞の挨拶でその名を挙げて「映画の神」と称える人物だ。周囲には彼の行状を知りながら沈黙を決めこむ利害関係者たちがいて彼を守る。被害女性の口封じ策は、お抱えの辣腕弁護士が入念に講じている。

被害女性たちの取材拒否には、性暴力被害を公けにすることへの恐怖や、業界大物から受けた被害を訴えてもという無力感に留まらない理由があった。ワインスタインとの示談には口外禁止条項(字幕では「秘密保持契約」)があり、彼女たちはいわば「沈黙の代金」として数十万ドルの示談金を受けとっていた。

しかしやがて、権力ある男性による性暴力を明るみに出そうというミーガンとジョディの粘り強い取材に手応えのある反応が返ってくる。

NY タイムズ紙の女性記者2人による同タイトル原作はピューリッツァー賞を受賞。2人の記事が出たのは2017年10月5日。性暴力を告発する#MeToo運動の盛りあがりにつながったとされる。1980年代、パラマウントや20世紀フォックスなどの大手映画製作会社とは違う挑戦的な作品でハリウッドの覇者に駆けあがったのがミラマックス社だ。ワインスタインは、記事が出た同月中に、かつて自身が創業した製作会社から解雇される。その後、被害当事者が次々と現われ、その数は最新報道で100人を超える。複数の裁判で合計39年の禁固判決が出て、すでに収監中だ。

監督はドイツを拠点に活動してきた女優で脚本家のM・シュラーダー。レイプ場面や性暴力そのものの描写が本作にないのは、ホテルの廊下だけでも女性たちの恐怖を想像できるからと監督は言う。性暴力を告発する映画が、性暴力再生産にもなりかねない危険を知っての発言だろう。

こう書いてくると、本作のテーマはワインスタ

インの性暴力事件のようだが、そうではない。これは家庭をもち夫とともに子育てに奮闘しながら、秘書やヘルプでなく、メインの記者として働く2人の女性ジャーナリストの頑張りを描いた作品だ。その点で佳作ではある。しかし鑑賞後に不消化の感覚が残る。家族も新聞社のチーム仲間も理想的で、なんだか非現実的だが、それはよしとしよう。私の不消化感は、「ワインスタイン以上に性加害者を守る法のシステム」こそが問題だという2人の発言と関係している。広報の惹句にも使われている文言だが、その肝心の「法のシステム」の解明はないまま映画は終わってしまう。2人が言う「法のシステム」とは、女性たちを数十年にわたって沈黙させてきた口外禁止を含む示談契約を指す。

いったい、それはどういう法理で法的に有効なのだろうか。日本でも民事であれば、不倫で協議離婚になった場合、協議内容に口外禁止条項を入れて慰謝料を上積みするといったことがある。しかし殺人、強姦といった刑法犯罪の被害を告発させない口外禁止の示談契約など、それじたいが違法ではないのか。示談金を受けとった被害者が口外すると違約金を課すという拘束性は法的に有効なのか。その拘束性は無効とはっきり否定されたわけでもないのに、なぜ被害女性たちは取材に応じるに至ったのか。記者の熱情にほだされたという以外に何があるのか、本作ではわからない。

実はタイトルの *She Said* の意味も、日本の観客にはわからないのではないだろうか。本作で言及される性暴力やセクハラは、発生時に警察に訴えたものがほとんどなく、物証もないケースが多い。ワインスタイン事件の報道やドキュメンタリーを見ると、“He-said-she-said”(「彼は言った、彼女は言ったの水掛け論」という意の常套句)の裁判になりかねないと指摘する者がいる。つまり物証がない昔の事件について好き勝手に言い放題の裁判に墮する懸念からの指摘だ。その懸念をはねかえしたい2人の記者は、女性たちが口外禁止の拘束を打破して声を挙げたことへの敬意から、タイトルを *She Said* として常套句の換骨奪胎をはかった。そうであるなら一層、口外禁止の示談契約が数十年の沈黙を女性たちに強いた法的システムの解明をしてほしかった。

(アメリカ、2022年、129分)